

東北を忘れない！ 博物館ネットワークによる支援活動

認定NPO法人大阪自然史センター 東日本震災関連活動助成2年目

中継ぎ役を自認する支援活動

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北沿岸部の博物館。本格的な復旧までの間、当地域の子どもたちを対象にワークショップを定期的に開催しているのが大阪自然史センターです。

ワークショップでは、同センターが開発した体験プログラムをベースに、東北沿岸部で発見される化石や、海の生き物などを素材とし、地域の文化や歴史を学びます。

「現地ではハード面の復旧が優先されます。私たちは中継ぎ役として、震災前に博物館が行ってきた普及・啓発活動を少しでも肩代わりできればと考えています。もちろん、現地の方々の協力が必要なので、お仕着せではない、現地の状況を考慮して継続できるプログラムの実施を心掛けています」と話す同センターの西澤真樹子さん。

東北を忘れないための試み

本プロジェクトでは、同様のワークショップを大阪でも開催しています。それはなぜでしょう？西澤さんは、「時間が経つにつれ、被災地のことを忘れがちになります。忘れないために、大阪の子どもたちにも同じプログラムを体験してもらい、被災地の現状を伝えていきたいのです。もちろん、私たち博物館に関わる者の現地での活動も伝えま

す」と話します。

本プロジェクトは今年度で2年目。これまで同センターが中心に行ってきたプログラム開発を今後は東北の大学生や現地スタッフと積極的に連携して行い、施設の復旧後を見据えた体制づくりを目指します。



現地の素材にこだわったプログラムは、子どもにも大人にも人気（福島県いわき市）



学生と現地で生物調査を行い、結果をプログラムに反映させる（岩手県大船渡市）

地域で 絆を深める

http://www.omnh.net/npo/

Osaka・Tohoku

地域を活性化しようと奮闘するNGO・NPO。ここでは、地域×環境をベースとしながらも、活動内容の異なる4団体の事例をご紹介します。

47都道府県、1741市町村。それぞれの地域で、地元の潜在力を発掘したり、他者との協働・連携を探る中で

地域で 伝統漁法を学ぶ

http://osugidani.jp/

Mie

NPO法人大杉谷自然学校 日本有数の清流・宮川で 伝統漁法を学び、その文化を伝える

総合環境保全活動助成2年目

見直したい地域の資産としての川

総延長91キロメートル。三重県だけを流れる川としては県内最長の宮川（みやがわ）。NPO法人大杉谷自然学校は、その最上流域にある多気郡大台町で環境保全活動に取り組んでおり、サマーキャンプなどで年間約4千人もの子どもたちを受け入れています。昨年スタートした新しい取り組みが「宮川流域における伝統漁法の調査記録、および継承のための環境教育」プロジェクトです。

「昔から宮川ではいろんな魚が獲れ、地域文化として根付いていましたが、徐々に消えつつあります。地元の小学生にアンケートを取ったところ、川で遊ぶ機会がかなり減っていることも分かりました」と話す同団体の岩脇直美さん。

伝統漁法の再興を目指して

2年目を迎えた本プロジェクトでは、調査記録を継続しつつ、子ども向けの伝統漁法体験プログラムをスタート。その第1回が5月31日に行われた「作って食べよう！川魚料理」です。「魚なんてさばいたことがないので、最初はみんな気味悪がっていましたが、地元のおばあちゃんに教えてもらいながらチャレンジすること

で、楽しい1日になりました。魚を焼くのも昔ながらの炭を使って…」と岩脇さん。

伝統漁法を継承することは、川を大切に思い守る人を増やすこと。さらに、地域の豊かな生物多様性や環境の保全にもつながります。大杉谷自然学校ならではの取り組みが、子どもたちと川の距離をぐっと縮めてくれるでしょう。



魚のさばき方を習う子どもたち



炭火を入れた一斗缶で川魚を焼く

NPO、企業、市民が参加して進める 再生可能エネルギーの取り組み

NPO法人環境ネットワークやまがた 地球温暖化防止助成2年目

初年度から盛り上がる活動

本団体の前身は、環境省の「環境カウンセラー制度」登録者による「やまがた環境カウンセラー協議会」（1998年設立）で、山形県内で先進的に環境保全に関する啓発活動を行ってきました。現在も多彩な活動を展開していますが、その一つに地球温暖化防止があり、本プロジェクトでは市民参加による地域での再生エネルギー導入を目指しています。

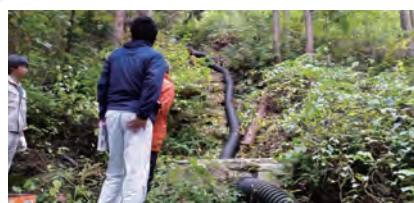
「皆さんとても熱心で、初年度のセミナーにご参加いただいた方々の『勉強も大事だけれど、とにかくやってみよう』という熱い思いが原動力になり、地域の個人32名と2団体に出資いただき、本年4月に『やまがた県民自然エネルギー株式会社』を設立。思ったより早い展開で、関わってくださる方々のパワーに驚いています」と話すのは、同団体の山田幸司さん。

10月に稼働開始予定の川西町太陽光発電所

当初は2年目に事業プランを策定する予定でしたが、事業化がトントン拍子に進展。この10月には、山形県南部の川西町で準備が進められている出力200kW、年間発電量20.4kW（予定）、事業費約7千万円の太陽光発電所が稼働します。

「今後も地域や市民向けの普及啓発活動は続けていきますが、今

回の具体的な事業は、市民・地域共同発電所のモデルプランづくりに大きく貢献してくれていると思います。これまでに培った事業計画の立て方、それに稼働すれば運用面でのノウハウも得られ、山形ならではの課題など、より実践的な情報発信もできるでしょう」。山田さんは2年目を迎えたプロジェクトに確かな手応えを感じています。



山形市内での小水力現地調査



太陽光発電施設が設置される川西町の現場

地域で エネルギーをつくる

http://eny.jp/

Yamagata

環境で地域を
元気にする！

NPO法人都留環境フォーラム 在来馬が耕す田畑で 地域文化を継承し農的暮らしを発信

環境保全型農業等助成1年目

なぜ在来馬で馬耕？

農業の機械化が進む前、在来馬は農家の大事な戦力でした。しかし、現在では全国で1900頭弱（公益社団法人日本馬事協会調べ）となり、めったに見ることのできない存在となっています。そんな在来馬をパートナーに新たな農業スタイルを目指しているのがNPO法人都留環境フォーラムです。

同フォーラムの岩田和明さんはこう説明します。「化石燃料に頼るトラクターだけではなく、馬耕をサブシステムとして確立したい。馬ふんは肥料になるし、エサは作物の残さや雑草で賄えます。この馬耕を生かすことで、耕作放棄地を田畑に利用しやすくなるなど、波及効果も期待できます。まさに、馬と共に暮らすからこそできる循環型農業ではないでしょうか」

子どもたちにも伝えたい馬耕

同フォーラムは、ネットでの情報発信の他、年間30回近くのイベントを開催。参加者アンケートでは、ほとんどの人が「循環型農業や在来馬に興味がある」と回答。岩田さんは「馬耕は今継承しなければ失われてしまいます。私たちの取り組みを知っていただければ、まだまだ多く

の方に参加していただけたと思います。全国に向けた情報発信だけでなく、今後は、小学生を対象とした馬耕教室を開くなど地域に密着した活動も予定しています」と抱負を語っています。

同フォーラムの取り組みは、NHKテレビなどのメディアも取り上げており、注目度もアップしています。



在来馬による田んぼの代かき



陽光の下、希望者が参加して行われた田植え